

たま※ [# 「ころもへん+攀」、U+897B]

一葉女史

青空文庫

上の一

をかしかるべき世を空蟬のと捨て物にして今歳十九年、天のなせる麗質、をしや埋
 木の春またぬ身に、青柳いと子と名のみ聞ても姿しのばるゝ優しの人品、それも其
 昔昔しをくれば系圖の巻のこと長けれど、徳川の流れ末つかた波まだ立たぬ江戸時代
 に、御用お側お取次と長銘うつて、席を八萬騎の上坐に占めし青柳右京が三世
 の孫、流轉の世に生れ合はせては、姫と呼ばれしことも無けれど、面影みゆる長襦袢
 の縫もよう、母が形見か地赤の色の、褪色で残るも哀いたまし、住む所は何方、むかし思
 へば忍が岡の名も悲しき上野の背面谷中のさとに形ばかりの枝折門、春は立どまりて御
 覽ぜよ、片枝さし出す垣ごしの紅梅の色ゆかしと延びあがれど、見ゆるは萱ぶきの軒端
 ばかり、四邊は廻ぐらす花園に秋は鳴かん虫のいろく、天然の籠中に收めて月に
 聞く夜の心きゝたし、扱もみの虫の父はと問へば、月毎の十二日に供ゆる茶湯の主が
 夫、母も同じく佛檀の上にとかや、孤獨の身は霜よけの無き花檀の菊か、添へ竹の後
 見ともいふべきは、大名の家老職背負てたちし用人の、何之進が形見の息松
 野雪三とて歳三十五六、親ゆづりの忠魂みがきそへて、二代の奉仕たゆみなく、一町

餘りなる我が家より、雪にも雨にも朝夕二度の機嫌きゝ怠らぬ心殊勝なり、妻もた
 ずやと進むる人あれど、何の我がこと措き給へ夫よりは嬢さまの上氣づかはし、廿歳と
 いふも今の間なるを、盛りすぎては花も甲斐なし、適當の躰君おむかへ申し度ものと、
 一意専心主おもふ外なにも無し、主人大事の心に比らべて世上の人の浮薄浮佻、才
 あるは多し能あるも少なからず、容姿學藝すぐれたればとて、大事の御一生を托すに足
 る人見渡したる世上に有りや無しや知れたものならず、幸福の生涯を送り給ふ道
 そも何とせば宜からんかと、案じにくれては寐ずに明す夜半もあり、嫁入時の娘もちし
 母親の心なんのものは、疵あらせじとの心配大方にはあらざりけり、雪三かく
 まで熱心の躰撰みも、糸子は目の前すぐる雲とも思はず、良人持たんの觀念、何
 として夢さらくゝあらんともせず、樂みは春秋の園生の花、ならば胡蝶になりて遊びた
 しと、取とめもなきこと言ひて暮しぬ、さるほどに今歳も空しく春くれて衣ほすてふ白
 妙の色に咲垣根の卵の花、こゝにも一の玉川がと、遣水の流れ細き所に影をうつし
 て、風なくとも涼しき夏の夕暮、いと子湯あがりの散歩に、打水のあと軽く庭下
 駄にふんで、裳とる片手はすかし骨の塗柄の團扇に蚊を拂ひつ、流れに臨んで立たる姿に、
 空の月恥らひてか不圖かゝる行く雲の末あたり俄に暗くなる折しも、誰が思ひにか比す螢

一風にたゞよひて只眼の前、いと子及ぶまじと知りても只は有られず、ツト團扇を高くあ
 ぐればアナヤ螢は空遠く飛んで手元いかゞ緩るびけん、團扇は卯の花垣越えて落ちぬ、
 是は何とせんと困じ果て、垣根の際よりさしのぞけば、今しも雲足きれて新たに照ら
 し出す月の光りに、目と目見合して立たる人、何時の間に此所へは来て、今まで隠れて
 も居しものか、知らぬことゝて取乱せし姿見られしか、見られしに相違なしと、面俄に
 あつくなりて、夢現うつむけば、細く清しき男の聲に、これは其方さまのにや返
 上せんお受取なされよと、垣ごしにさし出す我が團扇、取んと見あぐれば恥かし、美
 少年、引かんとする團扇の先一寸と押へて、思ひにもゆるは螢ばかりと思し召すかと怪
 しの一言、暫時は糸子われか人か、有無の間に迷ひし心、本の心に歸りし時は、卯の花
 垣に照る月高く澄んで、流れにうつる影我一人になりぬ、さるにても彼の人は誰ならん、
 隣家は植木屋と聞たるが、思ひの外の人品かなと、其方を眺めて佇立めば、風に傳たは
 る朗詠の聲いとゞ床しさの敷を添へぬ糸子世は果敢なきものと思ひ捨て、盛りの上に
 紅白粉よそほはず、金釵綾羅なんの爲の飾り、入らぬことぞと顧みもせず、過ぎし心
 に恥かしや、我れ迷ひたりお姿今一度見まほしと延び上がれば、モシと扣へらる、袂の
 先、誰れぞ才、松野か何として此所へは否や何時の間にと詞有哉無哉支離滅裂

上乃二一

丸窓まるまどにうつる松まつのかげ、幾夜いくよなが詠めて月つきも闇やみになるまゝにいと子の心こころその通りとほ、打うちあけて
 は問とひもならぬ、隣となりの人の素性すじやうき聞たしと思おもふほど、意地いぢわろく誰たれも告つげぬのか夫それとも
 に知らぬのか、よもや植木屋うゑきやの息子むすこにてはあるまじく、さりとて誰たれ住すみかへ替かはりし風説うはぎも聞
 かねば外ほかに人の有ある筈はずなし、不審いぶかしさよの底そこの心こゝろは其人そのひと床ゆかしければなり、用ようもなき庭
 歩行はあるきにありし垣根かきねの際きは、幾度いくたびか顧かへりみて思おもへば、さてもはした無なきことなり、氏うちも知
 らず素性すじやうも知らず、心こゝろ情だても何なにも知しれぬ人に戀こふとは、我われながら淺あせましきことなり、
 定さだめなき世よに定さだめなき人ひとを頼たのむ、婦人をんなの身みはかなしと思おももひ絶たえて、松野まつのが忠節ちうせつの心こゝろより、
 我わ大事わたいじと思おもふあまりに様々さま／＼の苦勞くらう心痛しんつう、大方おほかたならぬ志こゝろざしは知るものから、夫それすら
 空そらふく風かぜと聞ききて、耳みみにだに止とめんとせざりし身みが、何なんぞや跡あともかたも無なき戀こひに磯いその鮑あはびの
 只ひとり一人ひともの思おもふとは、心こゝろの問とはんもうら恥はづかし、人知ひとしらぬ心の惱こゝろなやみに、昨日きのふ一昨日きのふは雪せつぎ
 三うが訪おとづれ問とづれさへ嫌忌うるさくて、詞多ことばほくも交かはさざりしを、如何いかに聞きて如何いかばかり案あんじやしけ
 ん、氣きの毒どくのこととしてけるよ、いで今日けふの日ひも暮くれなんとするを、例れいの足あしおとする頃ころなり、
 日頃ひごろくもりし胸むねの鏡かゞみすゞしき物ものがたり、語はらに晴はらさばやとばかり、垣根かきねの近邊ほとりたちはなれて、見
 返かへりもせず二三ほ歩ほすゝめば遣やりみづ水なの流ながれおと清きよし、心こゝろに定さだまつて思おもへば昨日きのふの我われ、

彷彿ほうふつとして何故なにゆ糸いとに物ものおもひつる身みぞ、廣ひろき園そのふ生はは我が爲わめに四季しきの色いろをたゝかはし、
 雅みやびやかなる居ゐ間は我が爲わめに起居きよの自由じゆうあり、風かぜに鳴なる軒のきばの風ふうりん鈴つゆ、露つゆのしたゝる釣つり
 忍しのぶ艸のぐさ、いづれをかしからぬも無なきを、何なにをくるしんでか、要えうなき胸むねは痛いためけん、愚おろかし
 さよと一人ひとり笑わらみして、竹ちくえん椽えんのはしに足あしを休やすめぬ、晚ばんふうすう風ふう涼りやうしく袂たもとに通かよひて、空そらに飛とびかふ
 蝙蝠かはほりのかげ二つ三つ、夫それら漸やうやく見みえず成なりゆく、片かた折をり戸どを静しづかに音おとなふは聞きなれし聲こ
 音はねなり、いと子こ厨そりやのかたに聲こゑをかけて、玉たまよ雪せつぎやう三まゐが参まゐりたりと覺おぼゆるに、燈とも火しびとくと命い
 令ひつながら、ツト立たちて門かどの方かたうち見みやりしが、闇やみにもしるき白しろき手を舉あげて、稚おきなご兒ごが母はは
 よぶ様やうに差さまねぎつ、坐ざ敷しきにも入いらではるかに待まてば、松まつ野のは徐おもろに歩あゆみを進すすめて、早はやく
 竹ちくえん椽えんのもとに一いつ揖しゆするを、糸いと子こかるく受うけて莞にこ爾やかに、花はな 蕊むしろの半なかを分わけつゝ團うちわ扇あふ
 を取とつて風かぜを送おくれば、恐おそれ多おほしと突つく手て懸いんぎん懃なりなり、此このほどはお不ふ快くわいと承うけたまはりしが、最も早はや
 平へい日じつに返かへらせ給たまひしか、お年としご輩ごには氣き鬱うつの病やまひの出でるものと聞きき、例れいの讀どく書しよは甚はなだ
 わろし、大だい事じの御おん身み等なほざり閑ひまにおほしめすなど、知しらねばこそあれ眞ま實めいなる詞ことばにうら耻はづか
 しく、面おもてすこし打うち赤あかめて、否いやとよ病びやう氣きは最もう癒なほりたり、心しん配ばいかけしが氣きの毒どくぞと我わ
 れ知しらず出でる侘わびの言ことばに、何なにごとの仰おほせぞ、主しゆう從じゆうの間あひだに氣きの毒どくなどゝの御ご懸げ念ねんある筈はず
 なし、お前まへさまのおん身みに御ご病びやう氣きその外ほか何なに事ことありても、夫それはみな小おのれ生なまが罪つみなり、御ご

兩親さまのお位牌ゐはいさては小生おのれが亡兩親なきおやに對して雪せつ三何ざうなんの申まうし譯わけなければ、假令たとへ身に
 かへ命いのちにかへても盡つくし參まゐらする心こころなるを、よしなき御遠慮ごゑんりよはお置き下くだされたしと恨うらみ
 顔がほなり、これ程ほどまでに思おもひくるゝ、其その心こころ知らぬにも有あらぬを、この頃ごろの不愛想ぶあいさう我が
 心こころの悶もだゆるまゝに、詞交ことばかはすが懶もろくて、病氣びやうきなどゝ有ありもせぬ偽いつはりは何なにゆゑに云いひけん、
 空そらおそろしさに身みも打うちふるへて、腹はらたちしならば雪せつ三ざうゆるしてよ、隔へたつる心こころは微塵みぢんもな
 けれど、主しゆうの家來けらいの昔むかしは兎ともあれ、世話せわにこそなれ恩おんもなにもなき我が身みが、常日つねひごろ
 種々さまざまの苦勞くろうをかける上うへにこの間あひだ中ぢゆうよりの病氣びやうき、それ程ほどのことでも無なかりしを、
 何なに故ゆゑか氣きが鬱うさぎて、心こころにも無なき所置しよぢありしかもしれず、夫それがつひ氣きの毒どくにて言いひたるな
 れど、心こころに障さはらば二度んどとは言いはじ、汝そなたに捨すてられて我われ何なにとしてか世よには立たつべき、心こころお
 さなければ目めにあまることも有あらん、腹はら立たしきことも多さならんが、外ほかに寄よる邊べのなき身み
 なるを、妹いもとも娘むすめとも斷念あきらめて、教おしへ立たてられなば嬉うれしきぞと、松野まつのが膝ひざゆり動うごかして涙なみだく
 めば、雪せつ三ざう身を退しりて頭かしらを下さげつゝ、分ぶんにあまりし仰おほせお答こたへの言葉ことばもなし、お心こころほ
 細そき御身おんみなればこそ、小生おのれ風情ふぜいに御叮嚀ごていねいのお頼たのみ、お前まへさま御存ごぞんじはあるまじけれど、
 往昔そのかみの御身ごみぶん分ぶんおもひ出だされてお痛いたはしゝ、我われ後うしろ見みまゐらす程ほどの器量きりやうなけれど、
 赤心まごころばかりは誰たれ人ひとにまれ劣おとることかは、御心おこころやすく思おぼしめ召よせよ世よにも勝すぐれし聳むこぎ君み

迎へ参らせて花々しきおん身にも今なり給はん、嗚呼がましけれど雪三が生涯
 の企望はお前さま御一身の御幸福ばかりと、言ひさして詞を切りつ糸子が面じつと眺め
 ぬ、糸子何心なく見返して、我は花々しき身にならん願ひもなく、まして聳む
 かへんの嫁入りせんのと、世の人めかしき望み少しもなし、只汝さへ見捨ずは、御身さへ
 厭はせ給はずは、我が生涯の幸福ぞかしてと嬌然とばかりうち笑めば、松野じりり
 と膝を進めて、嬢さまは夫ほどまでに雪三を力と覺しめしてか、それとも一時のお戯
 れか、御本心仰せ聞けられたしと問ひ詰むるを、糸子ホと笑ひて松野が膝に軽く手を
 置きつ、戯むれかとは問ふ丈も淺し、親とも兄ともなく大切に思ふものをと、無心に言
 へば忝なしと一言語尾ふるへて消えぬ

(中の一)

洗ひ髪の束髪に薔薇の花の飾りもなき湯上りの單衣でたち、素顔うつくしき夏の富士の
 額つき眼に残りて、世は萩の葉に秋風ふけど螢を招ねきし塗柄の團扇、面影はなれぬ
 貴公子あり、駿河臺の紅梅町にその名も薫ほる明治の功臣、竹村子爵との尊
 稱は千軍万馬のうちに含みし、つぼみの花の開けるにや、夫が次男に縁とて才識
 並らび備はる美少年、今歳のなつの避暑には伊香保に行かんか磯部にせんか、知る人

おほからんは侘しかるべし、牛ながら引入れる中川のやどり手近くして心安き所な
 からずやと、打うめかれしをお出入の橐駝師某なるもの承はりて、拙郎が谷中の茅屋
 せき入れし水の風流やかなるは無きものから、紅塵千丈の市中ならねば涼しきかけ
 もすこしはあり、足を運び給はゞ忍ぶが岡の緑樹の朝つゆ、寐間着のまゝにも踏み給
 ふべし、螢名所の田畑も近かり、只天王寺の近き爲に、蚊はあまりすくなからねど、
 吹き拂ふに足る風十分なり、兎に角思ひ立たせ給へとて、紀の守が迷惑氣にも見えず
 誘ふにぞ、夫好からんとて夏のさし入りより、別室を仮住に三月ばかりの日を消し
 が、歸邸の今日の今も猶残る記憶のもの二ツ、隣家に咲ける遅咲きの卵の花、都めづら
 しき垣根の雪の、涼しげなりしを思ひ出ると共に、月に見合はせし花の眉はちて背けしえ
 り足の美しくし、返す團扇に思ひを寄せし時憎くからず打笑みし口元なんど、只眼の先
 に沸き來たりて、我れ知らず沈思瞑目することもあり、さるにても何人の住家にや、
 ひとがら人品の高尚かりしは、無下に賤しき種には有るまじ、妻か娘か夫すらも聞き知らざりし
 口惜しさよ、宿の主は隣家のことなり、問はば素性も知るべきものと、空しくはなど過
 しけん、さりとして今更問はんもうしろめたかるべしなんど、迷ひには智惠の鏡も曇りは
 て、や、五里の夢中に彷徨しが、流石に定むる所ありけん、慈愛二となき母君に、一

日しか／＼と打明けられぬ、さはいへど人妻ならば及ぶまじことなり確めて後斷念せ
 んのみ、浮たる戀に心ろを盡くす輕忽しさよとも覺さんなれど、父祖傳來の舊交あり
 とて、其人の心みゆる物ならず、家格に隨ひ門地を尊び、撰りに撰りて取る虫喰栗も
 世には多かり、藻くずに埋もるゝ美玉又なからずや、哀この願ひ許容ありて、彼女が
 素性問ひ定め給はりたし、曲りし刀尺に直なる物はかり難く、惑ひし眼に邪正は分
 け難し、鑑定は一重に御眼鏡に任さんのみと、恥たる色もなく陳べらるゝに、母君一
 ト度は惘れもしつ驚ろきもせしものゝ、斯くまで熱心の極まりには、何事引き出られん
 も知るべからず、打明けられしだけ殊勝なり、萬は母が胸にあり任せたまへと子故の
 闇に、ある夕暮の墓參の戻り、橐繩師許くるまを寄せて、入りもせぬ鉢ものゝ買上げ、
 扱は園内の手入れを賞めなどして、逍遙の端に若し其人見ゆるやと、垣根の隣さ
 しのぞけど、園生廣くして家遠く、萱ぶきの軒ば半ば掩ふ大樹の滴たる如き緑の色
 の目に立て見ゆるばか、聲きくよすがも有らざりければ、別亭に澁茶すゝりながら夫と
 なき物語、この四隣はいづれも閑靜にて、手廣き園生浦山しきものなり、此隣
 りは誰様の御別莊ぞ、松ばかりにても見惚るゝやうなりとほゝ笑めば、否や別莊に
 はあらず本宅にておはすなりと答ふ、是を話しの糸口として、見惚れ給ふは松ばかり

ならず、美しくしき御主人公なりといふ、然ればよなど思ひながら、殊更に知らず顔粧
 ひつゝ、主人は御婦人なるにや、扱は何某殿の未亡人とか、さらずは妾なんといふ人
 か、別して與へられたる邸宅かと問へば、否や然からず舊をいはば三千石の未流なり
 といふ、さらば旗下の娘御にや、親御などもおはさぬか、一人住みとは痛はしきこと
 なりと、早くも其の人不憚になりぬ、此處の主も多辨にや咳勿躰らしくして長々
 と物語り出ぬ、祖父なりし人が將軍家の覚え淺からざりしこと、今一足にて諸侯の列
 にも加へ給ふべかりしを不幸短命にして病没せしとか、或は其頃の威勢は素晴し
 きものにて、いまの華族何として足下へも依らるゝ物でなしと、口溲らして遽しく唇
 かむもをかし、夫に比べて今の活計は、火の消しも同じことなり、彼れほどの地邸に公
 債も何ほどかは持たまふならんが、夫も嬢さまが身じんまく丈漸々なるべしと、我れ
 入り立ツて見し様な話しなり、老爺は何として其やうに委しく知るぞと問へば、否や拙
 郎は皆目知るはずなけれど、一昨年病亡りし嬢さまの乳母が、常日頃遊びに来ての
 話なりといふ、お歳は十九なれどまだまだ十六七としか見えず、夫から思へば松野どの
 大層に老けられたりと我一人呑込顔、その松野殿とかは娘御の何ぞと問はれて、
 成るほどなるほど御存じは無き筈なりとて、更に松野の爲に頤しばらく働かせぬ、されば

こそ暮やすき、秋日の短時間に、糸子主従は竹村夫人が胸中の知己とぞなれりける

(中の二)

心は變化するものなり、雪三が往昔の心裏を覗はゞ、糸子に對する觀念の潔白なること、其名に呼ぶ雪はものかは、主人大事の二筋道、振むくかたも無かりし物の、寄る邊なき御身憐れやとの情やうく長じては、我れ一人をば天が下の頼もし人にして、一にも松野二にも松野と、隔だてなく遠慮なく甘へもしつ※強もしつ、睡れよる心愛らしきよと思ひしが、そもく流れに塵一ツ浮びそめし初めにて、此心更に追へども去らず、澄まさんと思ふほど搔きにござりて、眞如の月の影は何處、朦々朧々々、の淵ふかく沈みて、目に遮ぎるは月を追ひ日に隨ひて艶いよく艶ならんとする雨後春山の花の顔、妍ますく妍ならんとする三五夜中の月の眉いと子が容姿ばかりなり、かゝりけれども猶ほ一片誠忠の心は雲ともならず霞とも消えず、流石に顧りみるその折りく、は、慚愧の汗背に流れて後悔の念胸を刺つ、是は魔神にや見入れられけん、有るまじき心なり、我れに邪心なきものと思せばこそ、幼稚の君を托し給て、心やすく瞑目し給ひけれ、亡主に何の面目あらん、位牌の手前もさることなり、いでや一對

の智君むじぎみ撰み參まらせて、今世こんせの主君きみにも未來みらいの主君きみにも、忠節ちうせつのほど顯あらはしたし、然しかか
 はあれど氣遣きつがはしきは言葉ことばたくみに誠少まことすくなきが今の世いまよの常つねと聞きく、誰人たれびとか至信ししんに誠せいじ
 實つに、我が愛敬けいあいする主君きみの半身はんしんとなりて、生涯しやうがいの保護者ほごしやとはなるべきにや、思おも
 へばいとも覺束おぼつかなきことなり、我れに主從しゆう／＼の關係くわんけいなくば、我れ松野雪三まつのせつさうならずは、
 青柳あおやぎいと子嬢こぢやうの手を取りて、生涯しやうがいの保護者ほごしやとならんもの天あめが下したに又またとはあるまじ、さ
 りながら是は叶かなふべきことならず、仮かりにもかゝる心こころを持たんは、愛あいするならずして害がいす
 るなり、いで今いまよりは虚きよしん心平氣へいきの昔むかしに返りて何なにごとをも思おもふまじと、斷念だんねんいさましく
 胸むねすゞしくなるは、青柳家あをやぎけの門踏かどふまぬ時ときなり、糸子いとこが愛あいらしき笑顔えがほに喜よろこび迎むかへて、愛あひ
 らしき言葉ことばかけらるゝ時ときには、道みちに背そむかば背そむけ世よの嗤ものわらひ笑ものわらひにならばなれ、君故捨きみゆへすつる
 名眞なしんぞ惜をしからず、今日けふは思おもふ心こころもらさんか明日あすは胸むねの中うち明あけんかと、眞實まめなる人ひとほ
 ど戀こひは苦くるし、斯かかるおもひの幾筋いくすぢを擦より合あはされし身みなるものから、糸子いとこが心こころは春はる
 柳やなぎ、そむかず靡なびかずなよゝとして、無邪氣むじやきの笑顔えがほいつも愛あいらしく、雪三せつさうよ菊きくの秋あ
 草盛きんせいかりなりとかきくを、此程このほどすゞさず伴ともなひては給たまはらずやと搔口かきくど説せきしに、何なんの違背あはい
 のある筈はずなく、お前まへさま御都合ごつがふにて何時いつにてもお供ともすべしと、松野まつのは答こたへぬ、秋雨あきさめはれ
 て後のち一日けふ今日はと俄にはかに思おもひ立て、糸子例いとこれいの飾かざりなき粧よそほひに身支度みじたくはやく終りて、松野まつのが

来る間まち遠しく雪三がもと我れより誘ひぬ、と見れば玄關に見馴れぬ沓一足あり、
 客來にやあらん折わるかりと歩を返せしが、さりとも此處まで來しものを此まま歸る
 も無益し、と、庭より廻ぐりて椽に上れば、客間めきたる所に話し聲す、徐ら次の間に
 かいひそまりて聞くともなしに耳たつれば、客はそも誰れなるにや、青柳といふこゑい
 と子と呼ぶ聲折々に交りぬ、さても何事を談ずるにや、我れにも關係あり氣なる
 をと、襖に寄りて靜かに聞けば、斷續して聞ゆるもの語の意味明亮にあらねども、
 おほかた大方は知れ渡りぬ、聞く人ありとは知らぬもの、詞あまりは高からず、松野に向ひて坐
 したるは竹村子爵が家従の何がし、主命に依りて糸子縁談の申し込なるべし、其
 のときせつぎうけつぜん
 時雪三決然とせし聲音にて、折角の御懇望ながら糸子さま御儀他家へ嫁したま
 ふ御身ならねばお心承るまでもなし、雪三斷然お斷り申す御歸邸のうへ御前体よろ
 しく仰せ上げられたしといひ放てば、然る仰せあらんとは存ぜしなり、然らば賀君とし
 ては迎へさせ給はずやといふ、否とよ兎に角に御身分柄つり合はず、末のほど覺束なけ
 ればと言ひかゝるを打けて、そは御懸念が深すぎずや、釣合ふとつり合ぬは御心の上
 のことなり、一應いと子さまの御心中お伺ひ下されたし、其お答へ承はらずば歸邸いた
 し難し平にお伺ひありたしと押返せば、それ程に仰せらるゝを包むも甲斐なし、誠のこ

と申上あげん、糸子いとこさまには最もはや定さだまる人ひとおはすなりそれ故ゆゑのお断ことはりぞと莞爾にっこと笑えめば、
 家従かじゆうは少すこし身みを進すすませて、始はじめて承うけたまはりたり何方いづかたへの御縁組ごえんぐみにや苦くるしからずは仰おほせき
 けられたしと雪せつぎゆう三おもての面おもてキツと見みれば、糸子いとこも間あひの襖ふすまのま際にまびつたりと身みを寄よせつあや
 しのことよと耳みみそばだつれば、松野例まつのれいに似にぬ高調子たかてうしに然さらば聞きかし參まゐらせん御歸邸ごきていのう
 へ御主君ごしゆくん、殊ことに縁みどりくん君おつたに御傳ねがへ願ねがひたし、糸子いとこが契約けいやくの良人をうととは、誰たれにもあらず、
 松野雪三まつのせつぎずなは即かち斯おのれくいふ小生

下

戀こひは一方いつはうに強つよよく一方いつはうに弱よはきものと聞きくは偽いつはり何方いづれすてられぬ花紅葉はなもみぢの色いろはな
 けれど松野まつのの心こゝろ根ねあはれなり、然さりとて竹村たけむらの君きみが優やさしき姿すがた一度おもは思おもひ絶たえもした
 れ、浅あさからぬ御志みこゝろざしの忝かたじけなさよ、斯かく思おもふは我われに定てい操いさうの無なければにや、脆もろき情こゝろの
 やる方かたもなし、扱さても松野まつのが今けふの詞ことば、おどろきしは我われのみならず竹村たけむらの御使者おししやもいかば
 かりなりけん、立たちかへ歸かへりて斯かく斯かくなりしとも申まをさんに、何なには置おきて御おんさげすみ恥はづかし、
 睦むつましかりしも道理だうり、主従しうじゆうとは名なのみなりしならんなど、彼かの君きみに思おもはれ奉たてまつらん口惜くちをしさ
 よ、是これも誰たれ故雪ゆゑせつぎゆう三ゆゑ故ゆゑなり、松野まつのが邪心じやしん一いっツゆゑぞ、然しかはあれども御使者おししや歸路きろにつ
 き給たまひし後のち、身みを投なげ出だしての詞ことば今いまも忘わすれ難がたし、御身おんみは竹村たけむらを床ゆかしと覺おほすか、緑みどりどのと

やら慕はしく思ひ給ふか、さらばいか斗り雪三憎しと覺すなるべし、さりながら往日
 の御詞は偽りなりしか、汝さへに見捨ずば我が生涯の幸福ぞと、忝けなき仰せ
 承はりてよりのとゞ狂ふ心止がたく、口にするは今日始めてなれど、盡くしたる心はおの
 づから御覽じしるべし、姿むくつけく器量世におとりしとて厭とはせ給はゞ、われも男
 のはしなり、聞かれ參らせずとて只やはある、他人の眺めの妬ましきよりはと、花に吹く
 嵐のおそろしき心ろも我れ知らず起らんや、許るさせたまへとて戀なればこそ忠義に鍛
 へし、六尺の大男が身をふるはせて打泣し、姿おもへば扱も罪ふかし、六歳のむ
 かし「我れ兩親に後れし以來、延びし背丈は誰の庇護かは、幼稚の折の心ろならひに、謹
 みもなく馴れまつはりて、鉄石の心うごかせしは、搦へて松野の咎ならず我が心ろのい
 たらねばなり、今我れ松野を捨て、竹村の君まれ誰れにまれ、寄る邊を所と定だめな
 ば哀れや雪三は身も狂すべし、我幸福を求むるとて可惜忠義の身世の嗤笑にさせ
 るゝことかは、さりとして是れにも隨かひがたきを、何として何にとせば松野が心の迷ひも
 覺め、竹村の君へ我が潔白をも顯されん、何方にまれ憎くき人一人あらば、斯くまで
 胸はなやまじを、果敢な的身やとうち仰げば空に澄む月影きよし、肘を寄せたる丸窓
 のもとに何んの呟きぞ風に鳴る荻の友ずり、我が蔭ごとか哀れはづかし、見渡す花園は

夜の錦を月にほこりて、轉ぶ白玉の露うるはし、思へば誰れも消ゆる世なるを、我
 が身一ツなき物にせば、何方に何の障りか有るべき、我れ憂き世の厭はしきは今はじめた
 ることならず、捨てんは兼てよりの願ひなり、歎くべきことならずと嫣然と笑みて靜かに
 取出す料紙硯、墨すり流して筆先あらためつ、書き流がす文誰れくが手に落ちて
 明日は記念と見ん名残の名筆

青空文庫情報

底本：「武蔵野 第二編」今古堂

1892（明治25）年4月17日

初出：「武蔵野 第二編」今古堂

1892（明治25）年4月17日

※表題は底本では、「たま※[#「ころもへん十攀」、U+897B]《だすぎ》」となっています。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「いと子」と「糸子」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Julki

2019年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たま※ [# 「ころもへん+攀」、U+897B]
一葉女史

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>